

笠島重要伝統的建造物群保存地区

昭和 60 年、伝建地区に指定されたが全国で 20 番目、四国で内子に続いて 2 番目のことであった。江戸時代の建物が 13 棟、明治時代のものが 20 棟、その他大正昭和のものが軒を連ねている。

この笠島地区は、その昔海賊そして塩飽水軍の本拠地として栄え、集落は、うしろの三方を山に囲まれ東側の小山には城が築かれていた。選定理由は港町であるが、実は城下町としての面影を色濃く残している。水軍の城下町として発展してきたこの地区は、城根とも言われ、道路が複雑で食い違い十字路やT字路、また道幅を変えたり、湾曲して見通せないような造りになっており敵からの攻撃に備えている。このうち集落の東寄りや南北に走る道を「東小路」、これに直交しかつ海岸線に並行して弓なりに伸びる道を「マッコ通り」と呼んでいる。なおこの「マッコ通り」とは昔、この辺りが賑やかな町通りだったことから訛って言われるようになった。

豊臣徳川時代、御用船方と認められ廻船業が盛んであったが、1721 年幕府の方針の変更により、それも急速に衰えていった。仕方なく水夫や船大工達は家大工、宮大工へと転業していった。その技術は非常に高かったので次第に、塩飽大工衆として近隣諸国にその名を轟かせるようになっていった。例えば善通寺、備中国分寺の五重の塔や吉備津神社など有名な社寺を多数建ている。そしてこの町並みの家々も塩飽大工が自ら建てたものである。

建物は通りに面して格子構えに、二階には虫籠窓を設けたツシ二階建ての町屋形式の住宅が並ぶ。軒を支え装飾をほどこした「持ち送り」、隙間のない石垣「矢来」、壁には瓦を貼った「なまこ壁」や「焼き杉板壁」、屋根は瓦葺きで「むくり」と趣向を凝らしており、周囲の景観とよく合って古い町並みを見事に残している。なお現在、真木邸、真木邸と藤井文書館は内部を公開しています。

